

一九世紀の終わりに日本を訪れたあるメキシコ人の記録

ギジェルモ・クアルトウチ著

宇佐川佳子訳

船舶

一八九四年四月五日、メキシコ艦隊の練習艦サラゴサ号がメキシコ湾タンピコ港から世界一周の壮大な目標をもって出港した。その船の乗組員には見習いの海兵もいた。三年後の一八九七年の四月頃には目標を達成して、同じくメキシコ湾沿いのペラクルスに彼らは戻ってきた。それは総計五一〇〇〇海里にも及ぶ未知の海への船旅となった。当時メキシコの大統領であったポルフィリオ・ディアス將軍は満足感を隠せなかった。これでメキシコは世界の近代啓蒙国家への仲間入りを果たしたのである。

この冒険における主役としては実際に航海を経験した者達に加えて二つ挙げられる。一つは何も語らない船舶そのものであり、もう一つは大変多弁な医者である。彼はその船に乗っており、遠く見知らぬ土地で見たもの経験したことを事細かに記録している。

サラゴサ号は一八九一年にメキシコ政府の指示により、フランスのル・アーブルの造船所において地中海式に造られた。鋼鉄でできた船体を持つ砲艦で、帆船や蒸気船を發展させたような船首斜檣の水切りを備え、一〇cm口のシュナイダーキャネット砲と三七mm口のホッチキス銃を積んでいた。外観は戦艦のそれであったが、ほとんど最後まで練習艦として利用され、古くなり、使いものにならなくなると一九二〇年代後半に武装を解き、ペラクルスで解体された。

その船首の甲板には金色の文字で「準備周到」という motto が刻まれていたのだが、実際に必要とされるときにはいつもそこにいたのである。

まだ工場で作られて間もない頃に与えられた最初の任務は

一八九二年一月二日のことであった。プエルト・デ・パロスにおいて催されるアメリカ大陸発見四〇〇年の記念式典に出席し、祝意をしめすことになっていたスペイン国王女マリア・クリステイーナの王室帆船の護衛の任務を与えられたのである。

アメリカ大陸に戻るとサラゴサ号は二つの航海に乗り出した。まずヌエバ・オルレアンズへの航海、ついでもともと造られた場所であるヨーロッパはフランスへの再航海であったのだが、これによってメキシコの船舶としては初めて世界一周を果たす大きなチャンスを手にした。一八九四年四月五日タンピコを出航するとカリブ海、大西洋を通り、南アメリカ大陸沿岸を巡った後マゼラン海峡を渡った。太平洋側にわたると再び北上し、一八九五年七月二十九日にはアカブルコの港に寄港した。パナマ運河は単なる一つの計画に過ぎなかったのである。

一八九六年四月二三日、サラゴサ号は艦長であったアンヘル・オルティス・モナステリオの指揮によってグアイマス港を出て、コルテス海を東に向かった。サンフランシスコを訪れた後、太平洋を巡り、ハワイ、日本、香港、シンガポール、インド、エジプトに寄港した。スエズ運河を渡ると地中海へと進み、フランスに着いたサラゴサ号は、最終目的地であるその国で修復を受けた後、大西洋に向かい、一八九七年四月

にベラクルスに到着したのである。このように世界一周を果たしたサラゴサ号は、その日から取り壊される日まで唯一の場所メキシコ湾に幽閉されたのである。

一九〇四年には帆柱の修復が必要となり、一年後には当時非常に繁栄していたユカタン王国を統治者に招かれた将軍ポルフィリオ・ディアスが訪問する際の小艦隊に参加している。

一九一〇年のメキシコ革命以降、サラゴサ号の運命は微妙なものとなる。一九一四年一月一六日、グスタボ・マデロ大統領率いる立憲政府側についたサラゴサ号は、失脚したポルフィリオ・ディアスの甥であるフェリックス・ディアスによる反乱の制圧に尽力した。一九一四年四月二日アメリカ合衆国の侵略部隊がベラクルスに上陸すると、タンピコにいたサラゴサ号は敵の圧倒的に優れた軍備力を前に、その大砲に火を付けることはなかった。

一九一四年八月にベヌスティアノ・カランサを指導者とした立憲派による革命が大勝利を収めると、コアツァコルコスというメキシコ湾沿いの港に行くことになった。そしてその年の終わりにはそこからユカタンに向かい、ベンハミン・アルグメドを指導者とする中央政府に対する反乱を鎮圧するための包囲に参加した。

最終的には一九二三年一月五日アルバロ・オブレゴン將軍によって率いられていた政府に対してアドルフ・オ・デ・ラ・

ウエルタ及びグアダルペ・サンチェスが起こした反乱に参加し、反乱は反乱軍の降伏という形で終結した。それから間もなくしてサラゴサ号は解体され、ベラクルスの海岸に沈められたのである。何と稀少な運命であろうか。その一生の前半はディアス將軍の政府がメキシコの先進国入りを目指して掲げたテーマ「栄光と啓蒙」のために貢献したにもかかわらず、メキシコ革命の後には、二〇年にわたって混乱した状態にあった国内において権力争いに巻き込まれていったのである。

人物

イギリス人 Reginald Carey Brenton の指揮のもとアメリカ大陸周辺を巡っていた頃のサラゴサ号については乗務していた医師ルイス・メルガレホによって記されており、歴史記になっている。彼の旅行記は「カモメ」というタイトルで出版されており、そこから三ヶ月にわたる航海中に起こった出来事についてうかがい知ることができる。

しかしながらアジア、中東といったメキシコから遠く離れた国々での経験をより興味深く著しているのは東洋行ききの任務についていた医師カルロス・グラスの手記である。

彼の受けた旅の印象は一八九七年八月六日の日曜日から数週にわたりメキシコシティの週刊誌「エル・ムンド」に掲載された。そのタイトルは「コルベット艦『サラゴサ号』によ

る世界一周の旅についてメキシコ海軍医師カルロス・グラスの残した記録三七〇〇海里にわたる航海」であった。「カモメ」と異なり、その記録は細部にわたっており、文学的価値も高く、そこから一九世紀末のメキシコ人が自らと感覚を全く異にする未知で不思議に満ちた世界をどのように捉えたか大変貴重な情報を得ることができる。

カルロス・グラス本人についてはほとんど知られていない。百科事典にもメキシコ人名辞典にもその名は載っておらず、後世に名を残したのは旅の印象を記したその記録であるように思われる。彼個人の伝記的な日付を忘れることはあっても、彼の生きた時代特有のその気性、性格を我々は忘れることはないだろう。ポルフィリオ・ディアス政府の役人として彼はオプティミスティックな見方で人類の進歩、科学の絶対性そして当時世界各国、特にメキシコや日本のように大國化を目指していた国々において流行していた「啓蒙」という言葉の価値を捉えていた。

しかしながらグラス医師を引きつけたのはサラゴサ号の冒險の啓蒙性、科学性のみではなかった。その記録からは細部にわたる観察を好み、明らかに異質であり、当時普遍的であるとされてきたヨーロッパ的価値観とも全く異なる優れた社会の性質を理解しようとする姿勢がうかがえる。その試みは常にうまくいったわけではなく、当時アメリカ大陸において

支配的となっていた「発展」を遂げてヨーロッパ、特にフランスと肩を並べようという価値観の範囲を越えた文化性を前にして、彼と交流があり、話の最後まで引用したピエール・ロティのように否定的な記述をすることがあった。結局のところ彼の時代の人間は偏見を捨て去ることができなかったのである。しかし卓越したロマンティズム、「親愛なる読者」に常に語りかける文章の優美性そしてその時代特有の東洋主義によって、彼の記録は文学的価値として一九世紀にアジアの地を踏んだ数少ないメキシコ人のうちの一人の記録としての意味を持つ文書となったのである。

この論文においては彼の記録の中でも最も広範囲かつ細部にわたっている日本についての感想について示す。初版以来再び出版されることのないグラス医師の記述は何十年も後に気取った言い方で言えば「ジャポニズム」としてあらわれたものの先駆的な仕事といえるであろう。

日出づる国

日本（グラス医師の言葉をかりれば「日出づる国」）に関する記述は、中国（「王朝帝国」）についての記述とともに第二部を構成している。二〇章に凝縮された記述を通してキクの特異性、神秘性そして卓越性についてひも解いていこう。まず思ひ出さねばならないのは、当時の日本が明治維新の

はじめの三〇年の樂觀的な興奮の中にあり、サラゴサ号が初めてその浜辺に上陸した一八九六年八月一日の頃には日清戦争が日本の圧勝をもって終結しようとしていたことである。グラス医師が当時見たのは勢いがあり、勢力を伸ばそうとしている国であり、ヨーロッパの科学をうまく取り入れながらもその一方で発展を妨げるようにも思われる独自性を見せているようにもみえた。今日日本は世界において関心の的となっているが、研究家を悩ませているこの矛盾が約一世紀前に書かれたグラス医師の鋭い記述においてすでにみられるのである。

基本的にグラス医師が観察したのは五つの分野すなわち人、慣習、自然、都市、宗教的な場所である。この点についてはその時代に日本を訪れた他の旅行者の記述と本質的に異なっておらず、一世紀前の東洋観を独自のスタイルで記したピエール・ロティを手本とする描写が一貫してみられる。しかしながら医者であり、かつメキシコを「近代化」にすることに固執していた政府の役人でもあったグラス医師は文章そのものの「文学性」に非常に気を使う文学者が見過ごしてしまいがちな日本の物質的發展について特に注目した。例えば彼はメキシコ戦艦の医師として、一八九四年から九五年にかけての日清戦争における日本の圧勝についても当然敬意をもって繰り返して述べている。さらに日本の例はヨーロッパ以外の国が

国民を海外で教育し、招いた外国人とともに近代化の道をたどり、しかも独自の方法を用いた例であり、同じような道を目指していたメキシコ人にとっては間違ひなく興味深いもので、その造船所や病院においてみられる進歩はメキシコを圧倒していた。横須賀の軍基地を公式訪問し、その幅広く集中的な活動に感銘した彼は次のように記している。

「湾には一〇艦の日本戦艦が停泊しており、三艦は造船中で、残りは日清戦争で中国側に奪われた多くの戦艦の修復をしようとしていた。日本海軍の役人と英国、フランスでそれぞれ教育を受けた二人のエンジニアが我々に親切に色々と話してくれた。(…)煉瓦そして亜鉛板造りの別棟では、工房、炉、製錬所、作業場、溶接所、旋盤場、組立工場また巨大な鉄檻があり、船体や軍隊がそこで作られており、厳しい規律がしかれている。そこからは秩序、丹念さ、活発さがみてとれ、全て日本人の熟練した海兵やエンジニアによって指導されていた。外国の力を頼らず、設備や基礎となる考え方にのみこだわっていた。質素で慎み深く、異教徒であり、文明化することができない存在として信用されていた日本人によって仕事は行われていたのである。広場では乾ドックが船舶の清掃に追われており、その量があまりに多いため、そこで我々のコルベット艦を清掃することはできなかつた。」

東京帝国大学医学部を訪問した際には次のように記している。

「私の職務に関心をもった人が医学学校に案内してくれた。その建物は建設中だったが、あと少しすれば高尚な目標にふさわしい場となるであろう。現在は全て木造の古い建物で、教員はドイツ人で、学内ではなされる言語もドイツ語、学生数は一学年一〇〇人に満たず、学ばれている内容は我々のものと同じで違いはほとんどなく、医学知識を学ぶための博物館や実験室もあった。

そのため日本における医学は先進国と同レベルであり、知識を深めるために必要な要素が全て備わっているといえる。」

最後にグラスは熱っぽくその考えをまとめている。

「(…)研究室や造船所などに足を運んでみたが、奇妙なコントラストと二重構造で矛盾を抱えた民族の至高の精神に触れることができた。このように大変効率よく進歩しているため日本は急速に大國化し、現在ではアジア諸国の中でも優位を勝ち取っているのである。日本の第一印象は非文明的なでくの坊の国、というものであったが、調べていくうちに彼らは偉大で啓蒙的、かつ頭がよく働き者で、徳も高く勇敢な性質をもち、最大の文明及び人類の知における最大の進歩を達成する可能性を秘めた存在であることが

徐々に分かってきた。」

人々

グラス医師の抱いた日本の第一印象が「非文明的」というものであったことは事実で、横浜港に入港した際には次のように観察している。

「穏やかな海には竹でできた帆のイグサの舟が浮かんでおり、ほとんど裸の数人の日本人が揺れながら猫のような目をして、困惑した様子で我々を見ていた。それらの船には何人もの人に乗っていて、それぞれ少なくとも六人から八人乗せていたのだが、数人は全く何も着ておらず、残りは紺地に背中に色がはげ落ちて黄疽のように黄色くなっている神秘的な刺繍の施された上着、すなわちキモノを着ていた。(……) アリカミツバチの群れのようにサンパン(ボート)が集団になってやってきて、みすばらしい格好をした悪人が乗っており、ギャーギャーと叫んであちらこちらから何とかして船に乗り込んでこようとしたりため、ポンプから水を撒いてそのうるさい日本人を追い払わねばならなかった。」

東京の込み合った路面電車に乗った際に文明を体現するよう二人のイギリス人が乗り込んできた様子を観察して、筆者は次のように述べている。

「実際に二人のエレガントな婦人がその電車に乗ってきて、乗客を見てその裸に近い服装や座席や車内でのサルのような振るまいを目にし、複雑な表情で不快感を示した。最後には彼女たちも席につき、その場に居合わせた他の者は端にある向かい合った座席に集まっていたのだが、猫のような目つきで口を開けた彼らは奇妙な様子で、非常に感じのよいイギリス人の娘たちをじっと見つめていた。これに対して、彼女たちは自分たちから微笑んでいた。」

東京の中心地にある皇居を訪れ、その分館、庭園、防壁を細かく観察した後、彼は日本人についてお世辞ではない率直な意見を述べている。

「その巨大な壁の外側には純粋な日本人が群がり、遊び、叫んでいる。要するに狂っていて不安定な国民がみすばらしい様子で明らかに愚鈍な性質をもちながら生きているのである。」

日本人を意識的にとめて褒めた後、グラス医師はより楽な姿勢を取り、悪口を言うようになったようである。

加えて日本人女性についての記述は注目すべきである。この点についてはロティ、グラス両氏の観察にほとんど相違はない。グラスは銭湯で働く女性について述べている。

「中の部屋に通じる平べったい戸から畳の上をほんの小さな物音も立てないでムスメ(女の子)が出てきた。彼女は小

柄で年は一〇才か一一才くらいで、ふっくらしており例の微笑みを見せるとそのつり上がった目は頬の丸く青白い高い丘に隠れてしまう。目を引くのはその高さのある型破りの黒髪の髪型で、黒髪はニスを塗った部品のように輝いていたし、また彼女の着ていた緑色のキモノ（上着）には青色と赤色の大輪の花が描かれており、そのオビ、一点の曇りもないほど真っ白の足袋も注目すべきであった。地につくほどの御辞儀をした後、彼女はひどい英語で私に尋ねた。「パス？」（英語の Pass のことである）そうだと答えると、そのまま動作を続け、驚くほど器用にすんぐりした足の指をピンセットのように使って、木でできた靴を履いた。」茶屋を訪れた際に筆者は出迎えにきた女性たちを観察している。

「最初に年上でおはぐろをした女性、続いてもっと若い女性が入ってきたが、彼女たちもまたおはぐろをしていて変わった風貌をしていた。にこやかかつ機敏で、長い黒髪をもち、額が真っ直で、まだつぶらな瞳のムスメたちは一人ずつ戸口で靴を脱いで入ってきた。」

最後にはグラス医師は日本人女性の心理についての解釈を試みているが、プッチーニの演劇、マダムバタフライの激しい情熱には程遠い。

「日本人女性には不思議な印象を与えられる。誇張した容貌

で感情がなく、愛情も持たず他の民族のような艶めかしさもない。（……）彼女たちは憎しみも愛情も敬意も軽蔑も感ぜず、機械的で質素かつ純真で恥じらいという観念に欠けているが、与えられる指示に対しては従順で柔軟性を持つ。忠誠を求められればそれに従う。すなわち邪悪な考えを植えつけられれば大抵の軽い犯罪を犯し、地主が命じれば涙で瞳を濡らすことなく子供を死に至らしめるのである。日本人女性は何と希少で不思議な存在なのだろう！」

プッチーニの演劇の Pinkerton のようにサラゴサ号の海兵の何人もが一時的に日本人女性と一緒にいたが、出発で彼女たちと別れる際には「もうこの国にはうんざりだ。役人の中には結婚したものもいるが、後に離婚した。単調で延々と続く人生をよく笑い、ほとんど話さず、理解しにくいムスメとともに歩むことは困難である。」と感じている。

慣習

グラス医師は彼にとって風変わりを感じられた慣習、例えば食事を使う箸や、ゲタ、家の中に入る時に靴を脱ぐ習慣などについて、親しみを込めながら何度も言及している。下駄と靴を脱ぐ習慣については詳しい記述がある。

「下駄は楕円形の木の薄板と、先端で結ばれた二本のリボンでできており、リボンは板の側面に付着している。裏には

並行な板が二枚、楕円の板と垂直に、一枚は爪先の方にもう一枚はかかとの方についている。これらの靴を履くのは部屋から外に出るときで、戸口では必ず脱ぐ。そのため家に何人いるか知りたいならば戸口にある靴の数を見れば分かるのである。」

箸の使用については次のようにある。

「彼らは米を好み、手にした箸を巧みに使って口まで持っていき、喉に押し込むようにしてむさぼり食う。」

また、食習慣についても触れているが、それは酒や煙草、緑茶の愛好についてである。

「(…)クルマ(ジンリキシャ)は美味しい鮭やジンジャー、サケ(米のワイン)をたらふく食べたにもかかわらず、とても疲れている。(…)

その時誰もがパイプを取り出して、煙草に火をつけているのに気が付いた。彼らは早いペースで煙草を吸い、パイプの容量が小さかったこともあり、たびたび火をつけ直さなければならなかったのだが、非常になれた手つきで手にした煙草を取り出し、再びパイプに補充していた。」

日本茶に対してヨーロッパ文化を持つグラス医師は敬意を払っており、横須賀で受けた公式接待について満足感と失望感をまじえて次のように記している。

「レセプションの場で食事の前にはすばらしい緑茶が出され

たが、これは日本のしきたりで、大変結構なものであった。食前酒の方を好ましかったのではあるが。」

日本人の遊びぶりにもグラス医師は感銘を受けている。

「彼らは娯楽好きで、大通りや吉原で夜がふけるまで寝ずに遊び、しかも翌日朝早くから働くのである。」

明治時代の日本にみられる近代化と伝統との矛盾についてはグラス医師は次のように述べている。

「(…)土着民は一〇〇年もの歴史を持つ慣習を保っており、外国のものと混ざり、それを役立て模倣することで、その性質をより卓越した有益なものに改善していった。つまり戸口で外部のものを廃して、部屋や食料、衣服、宗教、生活においては自らの国独自のものに従っていたのである。

日本においては最も希少な対比、そして型破りの習慣がみられ「逆さまの世界」という呼び名がぴったりであろう。すなわちこれまでもそしてこれから世界全体にとって最大の驚き、最も希少な卓越性であり続けるのである。」

グラス医師の記述は予言めいている。

自然

サラゴサ号は横浜港から日本に入った。まだかなり沖の、海岸から数マイルのところまで航行者たちが最初に見たものは地平線に浮かぶ富士山の堂々たる姿で、神奈川の岸を目にして、

ピエール・ロティと同様に、北斎の有名な波を描いた絵を思い起こさせるような記述を記している。

「起床ラッパが鳴ると左舷及び右舷の警隊の緊急ラッパが響き、全員任務につき、定位置に移動するよう指示された。すでに诗情溢れるあの夢のキクの国が見えていた。右舷には雲に隠れるほど高くそびえた円錐が高くおうとつのある山脈から堂々たる姿で抜きんでいた。それは濃い霧におおわれ、灰色の空にその引き裂くような姿を際立たせていた。これこそが聖なる火山、富士山だったのである。」

注意深く観察していたグラス医師は、自然の本来の姿を交える人間の支配力を見逃さなかった。それは例えば奇妙な形の木々についてである。

「(・・・)人工的な形をして怪物や架空の動物のようになっていた。木々はよく成長しており、矮性植物でありながら美しい花を咲かせ、熟した実をつける。(・・・)

互いに相似するものがみられるのは日本のみである。そこでは木々や植物は全て栽培によって奇妙な形にされており、菱形や丸形など様々な形の葉で龍をはじめとする動物を形作っていた。日本に古くから伝わるこの猛獣に似せるにはつた植物が適している。そうすることで様々な形が生まれ、またいろいろな種が混ざっているため、発芽したときには複数の花あらゆる色とその獣の体を覆い、日本芸術独特の

マルチカラーの奇妙な斑点が生まれる。

植物はどんなに小さなものでも入念に手入れされている。」横須賀の基地に向かう車の中からグラス医師は日本の畑を観察したが、農耕とともに近代化へと進む日本の勢いがそこに表れていた。

「茶や綿、ブドウ、蚕を育てる桑の木、水田、松林など様々な植物が農耕地を彩っている。まるで絵画のような道程を四時間走り、トンネルと斬新な橋を渡るともうそこは横須賀だった。」

長崎にわたる際にはサラゴサ号は内海を渡らねばならなかった。グラス医師はその風景の美しさを目にし、そこには地震の恐れが潜んでいることを知りつつも、やはり感心している。

「間もなく九州の長崎に向けて出航する。我々は帝国の最南端を訪れ、内海を渡ることになる。そこには活火山があり、驚異的な地震によって無数の小島と一〇万マイルにもわたる水路を形成している。

何とすばらしい景観だろう。月は時に暗黒に隠れ、また時に最高に光り輝く。水路は大変狭く、交わっては別れ、また交わる。小島はまるで水につかった山脈の山頂のようである。

奇妙な地形とその美しい景観はほぼ完璧とっていいもの

である。樹齡何百年もの森林には石炭層が見え、白っぽい斜面では建設用の材料を運ぶ運搬車が昇り降りしていた。そこには漁村があり、地獄の炎のような神聖な赤色を水面に映し出していた。深い洞窟の暗い入口は身の毛もよだつような猛獣のように咽頭を広げていた。溶岩と花崗岩または玄武岩からなるつんざくような山々は驚くべき構造をしている。そして水路において出口のない迷路をずっと巡っている。そして、まるで素晴らしい展望の中心にいるようで、休むことなく景色が変わり、魅惑的かつうっとりさせるような万華鏡のようだった。」

グラス医師はその時代特有の精神の持ち主で、近代主義を過剰なほど唱えていた人物であったため、ロテイと同じように日本の風景に対してかなり慣習的な見方をしているといえる。

都市

日本の都市についての記述においてグラス医師はその建築物と活力の貴重な立証を残している。通りのせわしさ、たくさん的人力車と路面電車、人々の活発さという要素は日露戦争後の明治の日本の姿をまさに表しているといえる。彼の目にはヨーロッパ風の建築と日本の伝統的な建築との対比がはっきり映った。外国人居住者の多い横浜港において彼は次の

ように記している。

「その往来はサンフランシスコに匹敵する、あるいはそれ以上のものであった。浜辺では優雅で豪華なヨーロッパ風の建物が薄暗い林の中に浮かび、美しい様相を呈していた。そしてはっきりと認識できる通りは街道になっており、器を逆さまにしたような形の白あるいは黒色の帽子をかぶった人がいた。(・・・)

町はよく設計されており、その区別は建築物そのものから判断することができる。ヨーロッパ風の地域では全ては粗石積み式で、大がかりな建築は圧巻である。これに対して日本の都市は全て木造建築で瓦がある。通りは狭く、平戸で、竹を編んだ敷物をしいた床で、交差点はこみあい、上り坂や下り坂があり、といった具合である。(・・・)

町は電灯や無数かつ色とりどりで大きさも様々の紙でできた街灯で照らされて、素晴らしい夜景となっている。これに日本人の服装と、引きずって歩くと独特の音を立てる木製の靴を加えると、希少かつ無類の芸術的かつ特異な国民を初めて見たときに感じる魅力と素晴らしさを理解することができよう。(・・・)

そうこうするうちに目の前にはたくさんの方が建ち並び、どの家もみた目は同じで、外側は黒く、内側はきれいで白く、大小の差はあるものの、結局は同じである。」

彼は商店街や店内についても同様に生き生きと描いているが、時に困惑もみられる。

「私は何度も弁天通りという商店街を散歩した。(…)商品そのものに引きつけられた我々はいろいろと探し回り、手に届くものを買って求めた。それは絹織物であり、またはビヨウブや漆、青銅や木、象牙などでできたもの、あるいは刺繍したもの、硝子製のものや時計などであった。

床はまるで薄い板のようで、戸口からの距離が近く、カウンターさえもない。

掘って小屋を思い浮かべるといいだろう。何かを買いにいくと壇のはしに座って目的の品が並んでいるのを見ることができるのである。」

グラス医師の記述の中で注目すべきなのは下町に特徴的な場所である茶屋、レストランそして多種多様の劇場を訪れたときのものである。茶屋では給仕の多さからくる不思議な雰囲気と、次に引用するような音楽的な雰囲気を感じ取っている。

「(…)最後にはシャミセン(ギターの一種)が登場した。それは木でできた小太鼓で皮が張っており、その上には弦がついていて、弾くと機械的な音が出るもので、日本の楽隊を構成する。(…)彼らは奇妙な動きで体をひねり、マスクをうまく使いながら舞っていて、バックには打楽器の

演奏が流れているのだが、それは耳をつんざくほどうるさく、しばらくは楽しめるが、すぐに疲れてしまう。」
娯楽の場については次に挙げる記述がある。これは現在にも十分当てはまるであろう。

「(…)劇場の入口は人の出入りで込み合っており、木製楽器、太鼓、シャミセンによる日本音楽が響いている。通りでは日本人のたてる靴の音やクルマ(人力車)の往来戸外でマッサージを営む盲人の鳴らすホイッスル、警官が引きずっている缶の音が入りまじって、何か未知のもの、神話を模倣したようなもの、という印象を抱かせる。

(…)そしてその安売り店では一時的なものなのかあるいはすでに根付いているのか、ヨーロッパ風の服が売られているのが大変目を引いた。」

そうとは記していないが、明らかにカプキを取り上げて、グラス医師は日本の劇場について述べている。

「日本人は独自のドラマやコメディを好み、その作品は外国のものは少しも入っておらず、恋愛詩も喜劇も悲劇もそれぞれきちんとした劇作家がいる。一つ興味深い点は女性が役を演じることはなく、代わりにその役の服装に身を包んだ男性が演じていることである。」

宗教的な場所

グラス医師の記述で見落としてはならないのが仏教寺院と神道の神社、加えて火葬についてのものである。火葬をキリスト教信者がどのように捉えたかによって、筆者は当時世界で優位とみられていたヨーロッパ文化と異なる文化についての考えをはっきりと示している。

「火葬は古くから行われている。優れた高炉があるのだが、その存在そのもの、また火葬自体が野蛮なもののように思われる。」

総して言えば、グラス医師の見解もまたその時代のステレオタイプのものとは何ら変わりはなかったのである。しかしながら近代化への道を模索中で、日本と同じような問題を抱えていたメキシコの国民である彼は定義づけることなく観察しようとする姿勢、あるいは客観的であろうとする努力がみられるため、その頃日本を訪れたほかの旅行者に比べると実際の日本により近く接している。日本を離れる際、グラス医師は美辞麗句を並べる中で自ら感じたことをまとめ、未来を予言するような助言を残している。

「さようななら、おそらく永久に。夢にまで見た国よ。(…)
色々なものが入りまじってはいるが、一方では外来のものに染まっておらず、一点の曇りもない。純粹なる未開人あるいはあまりにも正直な文明人である。(…)

日本国が大國化することを祈るが、自らの生きる土地に留

まっけて欲しい。そこから一步出れば、特有の良さが失われてしまうだろうから。」

まだ世界一周が困難な時代にそれを達成したことで栄光を手にした練習艦サラゴサ号を待ち受けていた運命は複雑で、二〇世紀初めの数十年をそのまま表すかのように不安を抱えたものであった。